

銭函のなりたち

銭函の位置

銭函は、石狩湾のいちばん奥まった所にあり、湾の砂浜が途切れる位置にある、目の前は日本海を臨み、銭函天狗の山々を背にして、豊かな自然環境に囲まれていて、海洋性気候で夏は海陸風が目立ち、冬の季節風は比較的弱くなっている。1年を通じて気温の格差なく比較的温暖な気候である。

銭函はアイヌの人達が住む時代から、鮭漁・鯨漁の場所として栄え、北海道開拓の父、島 義勇(しま よしたけ)が札幌に開拓府を建設するにあたり、札幌へ海から至る交通上の要地として仮役所を置いた場所でもあり、明治13年(1880年)鉄道開通時に小樽と共に開駅した歴史のある所である。

地名の由来

北海道の大部分がアイヌ語地名である、アイヌ語を漢字で表記したのは、明治2年(1869年)からで、開拓使が漢字二字に収まるように配慮したといわれている。

名前の由来はいろいろ言われている。

- 1、アイヌ語で「セニ(シェニ)」「カシワの木」・「ポコ(ポク・パコ)」「ホッキ貝」という意味、セニパコがセニハコと永い間言い鳴らされたものに漢字をあてたといわれる。
- 2、「ゼニ」は「セニ」で「狭いところ」を意味し、「ハコ」は「崖」を意味する、「ゼニハコ」は「崖下の狭い海岸の集落」と言う意味である。
- 3、ニシンの千石場所として栄え、各漁家に「銭箱」が積まれていたという、「ゼニ」の「ハコ」に通じ縁起がよいところから古人はそのまま「ゼニバコ」と言い慣わした。

文政4年(1821年)、伊能忠敬の「北海道調査図」にヲタシュツ(歌棄)の地名はあるが、セニハコ(銭函)の地名は、松浦武四郎による「北海道全図」、万延元年(1860年)に突如として現れる、(松浦武四郎が「此処鮭多(ここにしんおお)くして 何時(いつ)も漁事有(りょうごとあり)て よろしき故(ゆえ) かくの如(ごと)く 号(なず)けしものか」と書き記し、ニシンが豊漁で縁起が良い所の土地であると説明を加えています。)

ヲタルナイ～セニハコ～銭箱～銭函 □

ヲタル(小樽)の名前の発祥であるヲタルナイ川(オタナイ川、オタネ川)は、「後志国」と「石狩国」の境界でした。(明治以降の行政区画名である。)

このヲタルナイ川河口(現 新川河口)にアイヌの人達が集落を作っていて、鮭の好漁場であるとともに川の流域は木材の豊富なところでもあった。

慶長元年(1596年)、福山(松前)の住人の八木勘右衛門(やぎ かんうえもん)が、ヲタルナイに来て漁業に従事した最初の和人となる、この漁は鮭漁と思われる。

安政以前(1854年以前)、「セニハコ」はわずかに漁小屋があるのみであった。

「セニハコ」は言葉としては使われていたが、地名としての出てきたのは万延元年(1860年)、松浦武四郎による「北海道全図」に地名として現れる。

「セニハコ」は「ヲタルナイ」と言う地域の中の一部であった。「ヲタルナイ」は「松前藩」が蝦夷地(北海道)を統括するその一部でもあった。「松前藩主 松前慶廣(まつまえ たかひろ)」は、文禄2年(ぶんろく、1593年)、豊臣秀吉より蝦夷地の支配権を認める「朱印制書」を授かる。慶長9年(1604年)、徳川家康より蝦夷地の支配権と交易独占権と徴役権を認める「黒印制書」を受ける。「松前藩」は、米の生産を伴わない為、地域特産物の専売、交易経済の運用、移出入荷物に対する徴役によって藩の財政と家臣の知行(家臣に支給された土地、俸禄(ほうろく、給与)のこと)に充てていた。

この時代、松前藩は商場(場所)知行制をもって主従関係を結んでいた。知行を持つ家臣たちは、交易権を「場所請負人」の名目で商人に代行させて知行主は一定の運上金を得るという制度になった、これが場所請負制度である。

知行主 氏家唯右衛門の場所請負人3代岡田半兵衛 請負の「ヲタルナイ場所」の中に「セニハコ」が出てくるようになる。

ヲタルナイ～セニハコ～銭箱～銭函 □

元禄4年(1691年)、松前藩はヲタルナイのアイヌの人達をクッタルウシ(入船町河口)に移動させた。クッタルウシに移転後もヲタルナイの呼称は引き続き使用した。(クッタルウシがヲタルナイの中心として発展してゆく。)

松前藩は知行主にヲタルナイ川からヲコバチ川(於古発川)に至る間を「ヲタルナイ場所」として与えた。知行主 氏家唯右衛門は場所請負人 岡田彌三右衛門の支配人 岡田(恵比須屋)半兵衛に松前の経営を任せ「ヲタルナイ場所」支配人は、享保年間(1716年)から俵屋紋兵衛、中村友右衛門、佐々木藤蔵、増川五衛門、浅川長次郎、天保13年(1842年)磯屋久五郎、安政6年(1859年)田澤長兵衛、文久3年(1863年)清水利右衛門にと受け継がれ、慶応元年(1865年)の場所廃止まで続いた。

「ヲタルナイ場所」として漁業が発展してゆくが「セニハコ」の地名は出てこないが、ハルウシ(張碓)、レフンノツカ(礼文塚)、ヲタスツ(歌棄)はでてくる、セニハコはヲタスツとならんで呼ばれていたらしい。寛政年間(1789年)、恵比須屋半兵衛がハルイシ(張碓)に漁場を開設し番屋をたてる、この時代は鮭漁(にしんりょう)で、鮭は岩浜で海草のある所に産卵するので、岩浜であるクッタルウシからハルウシ、ヲタスツ、ゼニハコ川までの間で漁が行われセニハコに漁師小屋が立てられた。

「ゼニハコ」という呼び名が序々に広まっていった。

ヲタルナイ～ゼニハコ～銭箱～銭函 □

「ゼニハコ」は序々に呼び名が定着してきた。

安永9年(1780年)、松前藩主の申し付けにより、松前の商人阿部屋(村山)傳兵衛が蝦夷地を巡察した、その後、イシカリ川鮭漁ならびに近海鮭漁業を命ぜられ、ゼニハコ以北の鎮守としてゼニハコに「尊伝稲荷神社」(豊足神社の前身)を建てる。豊受姫大神(とようけひめのおおかみ)(食物の神)を守護神として、漁場の鎮護大漁安全を祈願したと伝えられる。明治4年(1871年)に再建されたとあり、最初に建てられた場所はウタスツの高台(現銭函1丁目)にあったと思われる。それは安政4年(1857年)、蝦夷地各地の沿岸を描いた「鳥瞰図」の中の「ゼニハコ」の絵図に弁天社として描かれているため、明治4年(1871年)に再建された場所が銭函稲荷まち(現銭函2丁目)である。

天保9年(1838年)、「ゼニハコ」が地名として記される。場所請負人恵比須屋半兵衛のヲタルナイ場所支配人増川五右衛門が「銭箱に場所1ヶ所開設」と「支配人履歴」に記載され「銭箱」の名が出る。この年、「尊伝稲荷神社」を「豊足神社」と改称する。

天保13年(1842年)、ヲタルナイ場所支配人が「磯谷久五郎」となる。

安政2年(1856年)、ヲタルナイ場所支配人「磯谷久五郎」がゼニハコ川に木橋を架設する、長さ3間(5.4m)、幅2間(3.6m)である。

安政3年(1856年)、松浦武四郎による廻浦日誌(かいほにっし)「東西蝦夷山川地理取調日誌」の中に「レブンズカ 二八取小屋 十二、ヲタスツ 十六、ゼニハコ 五六、番屋 一」との記述あり、「ゼニハコ」が地名として認められたと思う。

(二八取小屋は、漁獲量の二割が税金で、八割が自分の取り分となる割合のこと。)

ヲタルナイ～ゼニハコ～銭箱～銭函 □

安政4年(1857年)、箱館奉行 堀 織部正利熙(ほり おりべのしょうよしひろ)は、西蝦夷海岸を巡検する。随行人は仙台藩 玉虫 左太夫(たまむし さだいゆう)と 鍋島藩 島 義勇(しま よしたけ)が随行し旅行誌を記し、銭函地名由来等も記す。

この年、場所請負人 恵比須屋 半兵衛は支配人磯谷 久五郎に命じ、ゼニハコに「通行屋」を建てる、番人に佐々木藤蔵がなる。 なお磯谷 久五郎は、アサリ・ゼニハコ間に幅2間(3.6m)の海岸道路を開削する。さらにゼニハコからホシポッケ(星置)に至る道路を開削する。距離30間(3,27km)幅2間(3.6m)である。陸上の交通が少しずつさかんになり、銭箱の発展の基礎となってゆく。

安政6年(1859年)、場所請負人 恵比須 屋半兵衛はヲタルナイの支配人を田澤 長兵衛とする。

文久2年(1862年)、秋田から漁民数十人が銭箱に移住し、秋田太平山三吉神社の分神を祀る「銭箱 太平山 三吉神社」を創建する。その時、尽力した人達は、河島久次郎、金子与助、竹田安次郎ほか数名いた。彼らもまた銭箱の街の発展に寄与してゆく。

慶応元年(1865年)、幕府は場所請負人制度を廃止する、恵比須屋(岡田)八十次は罷免となったが本陣(現小樽堺町)及び通行屋(銭箱)のみ岡田家が従来通り取り扱うことになる。ヲタルナイ場所は「村並」となり、「銭箱」は、頭取 小林友三郎、小頭 藤蔵、百姓代表 長右衛門らの代表者を置いた。村としての体制が整ってきた。